
騎士と竜 Dragon Slayer

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士と竜 Dragon Slayer

【Nコード】

N4785C

【作者名】

木野目理兵衛

【あらすじ】

「我が妻子を奪いし竜よ、許すまじ。」その一念でジョージは人を止め、機械の槍を担い、戦場へと向かう

第一章

醒暦1880年 九月 詠霧趣西南部 イギリス サマセツト地方

竜が架空の存在から現実の存在になったのは、一体何年前になるだろうか。

いや、この記述は正確では無い。

何故ならば、竜が現実の存在で無かった時は、あつた時よりも確実に短いからだ。

神話の時代において、彼等は神々と共に、人の身近に居た。しばしば敵対者として、時折は協力者として、多くは倒し、倒されるべき唯の相手として。古代においてもまた同様であり、中世においては時代と共に伝説として語られる様な存在へと移って行つたが、依然としてその実在は信じられていた。

その信仰が揺らいだのは近世に入ろうとする時で、確たるものとなつたのは近世に入ってからである。

回教圏への十字軍遠征の流れを汲むイベリア再征服活動の熱狂は、イスラーム人々を狭い半島から海の彼方へと押し遣り、そして訪れた大航海時代によつて皇路覇は新大陸含む幾つもの地域と結ばれた。結果として旧来世界を構築していたシステムは変容を余儀なくされ、また人々も変わった。

大海原を駆け巡るには技術が要り、技術は知識が齎す。知識とは知恵の具象であり、そして知恵は神々が人々に持つ事を禁じたものに他ならない。知恵を得る事は少なからず神々から離れる事で、それは即ち神々と共にあつた竜の実在を揺るがすものだった。後々訪れる事となる啓蒙の光が、彼等を更に闇へと追い遣つた。

だが知恵の焰も啓蒙の光も、所詮は闇夜を照らすだけで、その存在を消す訳では無い。大航海時代突入と共に、『保因者』（キャリアー）が皇路覇に出現し、梅毒以上の速度を持って蔓延した。老若

男女誰彼、後天的か先天的かに関わらず、少なくない者達が人では無い何者かへと変異した。変異の理由は不明であり、病でも無い為治療法も無く、ある種の因子の所為なのだろう、等と言う曖昧模様な理由で変異者は保因者と呼ばれた。

この古典を通り過ぎて神話の時代に回帰した様な者達の存在が、竜實在の根拠無き信憑性を生む。

そこに確たる根拠が生まれたのは1842年、詠国の古生物学者リチャード・オーエンによるものだった。

彼はそれ以前に、自らの元に持ち込まれた三種の化石が今までに発見されたどの生物でも在り得ないとし、新たな種族として『恐竜』と命名していた。その彼の元にある生物の骨が送られてきた。

コーンウォール地方で発見されたと言うその骨は殆ど原型を留めており、全体の形状は恐竜と非常に良く似ているものだった。だがそれは実に真新しく、どう見ても恐竜が存在したであろう何億年前のものには見えなかった。まさか現代のブリテン島に、恐竜の生き残りが存在していると言うのだろうか。

ただ、このどう見ても造り物には見えない骨には二つ程、恐竜には在り得ないものが存在した。全長の三倍を誇る一対の大翼である。それはしかもしっかりと四足が存在する上で存在した。リチャードの脳裏にはある生物の名前が思い浮かんだが、あえてその名を口にしなかった。それは恐竜が今も生きていると考えるより馬鹿げたものであったからだ。しかし、現に彼の目の前には骨が存在する

リチャードは苦悩した。彼は元々保守的思想の人間である。同時に存在した進化論の提唱者チャールズ・ダーウィンとは宿敵同然な程に。自分で連想しながらも、認める事等出来なかった。だが、最終的には認めざるを得なかった。それ以外に説明の余地が無かったのだから。

彼は恐竜という新分類の発表の後、第四の骨を見せながら渋々とこう言った。

これは紛う事無き真正正銘、真の竜の骨である、と。

こうして近世の始まりに滅びかけた竜……因みに、学術的には恐竜との混同を避ける為、真竜と呼ばれているが、ここでは竜で統一する……は、再び蘇った。その後この波を受けて幾多の冒険家が秘境を訪れ、そして遂には生きた竜の発見にまで及んでいる。有名な所では我等が大詠帝国のチャレンジャー教授、そしてしばしば地底探検自体に目が向けられがちな土壺のリーダーブロック教授等である。

だがしかし、竜の実在が確証されて喜ぶ者等、学者連中以外に果たして居るのだろうか。

少なくともジョージ・サリンジャーにとっては悲哀と憤怒を生む存在でしか無かった。

最初の疑問に応えるならば竜が現実から姿を隠し、再び現れるまでの間は精々百年か二百年、多くて三百年。そこから再び世に現れたりチャード・オーエンの命名の時期から考えると半醒紀ばかり経過していた。人の一生で考えれば長い様で短く、またその逆でもある歳月。どうせならばそのまま時の塵に埋もれ、化石として姿を現してくれたならばどれだけ良かった事だろうか、とジョージは真剣に思っていた。

先に上げた竜発見の経緯の、どれか一つでも違えば、それもありませんたかもしれない。しかし歴史はその道を辿らなかつた。竜は学者達によって生物としての枠を設けられ、この現代で悠々と翼を広げている。

何と愚かな事か。学者達は勘違いしているのだ。竜は彼等の知的好奇心を埋める為のただの研究材料でも無ければ、名誉と地位を与える生きた標本でも無い。どれだけ希少だろうと、竜は我々人類にとって歴然たる敵なのだ。人を襲い、その血肉を喰らい、財産を奪い、神を嘲笑する存在自体が絶対悪の怪物である。

そう断言する程にジョージは竜を憎んでいた。心の底から。魂の淵から。

何故なら、竜は彼の最も大切な者達を奪ったからだ。

そしてその憎悪は彼に行動する様駆り立てる。

ジョージは今、聖マイケルの道を馬に乗って進んでいた。

手綱を握る手に尋常ならぬ力を込めて、背に乗せた機械の槍を揺らしながら、彼は平原を向かう。

その先こそが決戦の地、半年に及ぶ彼の苦悩を終わらせる場所、グラストンベリーにおいて他ならない。

数多の幻想が霧の中で踊り、アーサー王が眠る、芳醇なる林檎の島アヴァロンこそここだと言われる場所。

そこに倒すべき竜が居る。そしてもう間も無く、狩人にして、騎士が到着するのだ。

聖ゲオルギウスの名を担う、平和を愛した哀れなる男ジョージ・サリンジャーが。

第二章

醒暦1880年 三月 詠霧趣西南部 イギリス サマセツト地方

「それじゃ行つて来るよ。」

「いつてらっしゃい、あなた。」

そう言つてサロメは彼女の夫、ジョージ・サリンジャーの頬に唇を押し付けた。

ジョージはくすぐつた様に身震いしながらも、嬉しそうに口髭をたくわえた唇を吊り上げる。

夫婦が微笑み合っていると、妻の傍らからひよこりと子供が顔を出した。

まだあどけないジョージとサロメの息子、カラムだ。

彼は人形を片手に何か言いたげな様子で、自分の何倍も大きな父親をじつと見つめている。

それを察して、ジョージは右手を伸ばし、カラムの巻き毛をくしやくしやと撫で回した。

途端に、少年の顔が笑みで満たされる。金色の髪がまるで麦畑の如く揺れた。

「それじゃ父さんは仕事に行つて来るから、」

しゃがみ、カラムの目線に合わせながらジョージは言う。

「母さんの面倒を良く見て、しっかりと留守を守っているんだぞ？
いいな。」

父親の言葉に息子は二度程大きく頷いた。夫婦の視線が重なり、二人は再び微笑み合う。

そしてジョージは、妻子が手を振る姿を背中に受けながら、己の仕事に出かけた。

彼は農夫である。その父も、そのまた父も、更にまた父も農夫だった。先祖代々脈々と続く農夫の家系だ。詠霧趣はその資本を根底

として、何処よりも早く近代化の波が巻き起こった国である。そんな中で、少なくない者達が自分の土地を捨て、或いは捨てさせられ、労働者として大都市圏へと移って行った。

しかしジョージとその一族は農夫であり続けたし、これからもそうあり続けるだろう。

人間は鳥では無い。その背中に翼は生えていない。この地上で生きる以上、大地に足を付けていなければならないのだ。ならば貨幣等と言うユダヤ人が造り出し、後から価値を生み出したものには無く、神がもたらした作物にこそ生きる術として頼るべきでは無いだろうか。

それが真つ当な教育を受けた事の無いジョージが生活の中で見出した哲学であった。

彼は都会人から見れば粗末な家に住み、数も揃っていない服を着古しながら、毎日汗水流して働いているが、生活は決して楽にはならない。その手は硬く強張り、絶えず土に汚れていた。

それでも彼には皆の生きる糧を作っていると言う誇りがある。そして同時に、見分不相応な財を持つ事に対する言い知れぬ畏れも持っていた。彼は敬虔な清教徒だった。

ジョージは村人達に挨拶をしながら、農園へと向かう。

その思考はやがて息子カラムへと移った。

まだ幼い我が息子。自分とサロメの愛らしい天使。

出来るならば、彼にもこの生業を継いで欲しいものだった。だが、彼の人生は彼のものである。もし農民で終わる事を嫌がり、都会へと行きたいと望むならば、ジョージはそれを支援してやるつもりだった。

とは言え、カラムはそんな事を悩む年頃では無かった。今の彼の悩みと言えば、夜中に行くトイレだろう。

我が息子は大きくなった時どの様に考えるだろうか。

そう思うと、ジョージの唇が自然と綻んだ。何にせよ、幸せになつてもらいたいものだ。

そんな風に村から離れ、平坦な畦道を歩けば、やがて彼は畑へと辿り付く。

さあ、今日も仕事だ。明日の、来週の、来月の、来年の収穫の為に精を出さねば。

彼はそう何時も通りに張り切って踏み込んだ。

だがジョージは、直ぐにこの日は何かが違うている事に気が付いた。

普段なら何処からとも無く聞こえて来る鳥の囀りが聞こえない。辺りを飛び交う蟲一匹見られない。風が早く、雲の流れが実に忙しくない。まるで何かに怯えているか、或いは何かから逃げている。そんな風を感じられた。

彼は周囲を見渡した。だが何か変わったものは無かったし、特に違いも見受けられない。

だがやはり何かがおかしい。

頭では解らずとも、体は既にその異変を察しているのだろう。ジョージは我知らず身震いしていた。

手が震え、足が揺れ、歯がかちかちと音を立てている。とてもではないが仕事にならない。

ジョージは溜息を一つ上げながら畑から出て、畦道にある石の上に腰を下ろした。震えを抑えようと両手を組み、その上に顎を乗せる。それでもまだ収まらない。彼はぎゅっと力を込めた。そして何とは無しに、畑の向こうにぼつねんと、老人の頑固に残った歯の様な小さな森へと視線を向けた。

その森が、紅い閃光と共に爆散した。

突然の事にジョージは勢い良く立ち上がると、震えも忘れて硬直した。

森は粉塵を上げて吹き飛び、中空に舞い上がった木々は碎け、その枝葉を振り落とす。

それから少し遅れて、巨大な何かが高高く飛び上がり、太陽を覆い隠した。

その時現れたそれは、ジョージの瞳に強く深く焼き込まれた。

竜である。太陽の中に見える大きさは六ヤード近くもあり、巨体を覆い尽くす鱗が光を受けて真紅に輝いていた。その背には全長の三倍はある一対の蝙蝠の如き翼が羽ばたいていて、その後ろで巨木のように太い尾が揺れている。長い首から伸びた顔は何と言ったらいいだろうか、蜥蜴と狗と馬を掛け合わせた様な面立ちだった。そこには表情めいたものが見受けられ、遠目にもジョージは嫌悪感を覚えた。

だが、最も印象深かったのはその瞳である。くすんだ黄金の眼は明け方まで居座り続ける不吉の星の様で、そこには不気味な光が宿っていた。猛禽類の様な鋭い瞳、獲物を探す捕食者の瞳である。

その眼が……ジョージの気の所為等では無く……彼のものとかち合った。

天と地、二つの境界線を越えて、人と竜の視線が合わさる。

次の瞬間、竜はその体勢を翼と尾で維持したまま、ぐわりと首を上に向けた。更に仰け反り、喉が一気に膨らむ。

ぞくりとジョージの背筋に悪寒が直走った。

逃げなくては。逃げなくては不味い。

そう直感が告げると同時に、彼はぱつと振り返った。

焦燥のままに脚を踏み出そうとした刹那、ジョージの背中に熱と衝撃が飛んで来た。

肺から空気を吐き出しながら、彼は中空へと投げ出され、そのまま地面へと叩き付けられた。反動で二、三跳ね上がり、大地に頭を擦られながら突き進んで後、彼の体はようやく静止した。

頭と背中、他にも肩や脚に鈍い痛みが走る。砂埃で汚れた額から熱い血が垂れてきた。疲労と苦痛でうつ伏せのまま起き上がる事が出来ない。意識も朦朧としていて、視線も掠れていた。

一体自分の身に何があったのだろうか、とジョージがおぼろげに考えていると、その頭上で咆哮が上がった。

首を軋ませてどうにか首を上げれば、あの紅い竜が飛んで行くの

が見えた。

自分の事等興味も無いと無視する様に、村の方向へと一直線に飛んで行く。

ジョージは最後の力を引き絞り、震える腕を伸ばした。指の隙間から、飛び去って行く竜が見えた。

「……待……。」

止める様に、掴む様に、ぐっと拳を握る。だが竜は止まらない。既にその姿は小さく、遠い。

「……。」

ふっと力が抜けた。拳が下がり、瞼が落ちる。

咆哮と爆音、そして悲鳴が上がるのをかすかに聞きながら、ジョージの意識は途絶えた。

第三章

一体どれ程の時が経ってか、ジョージ・サリンジャーは眼を覚ました。

「……おい起きたぞっ。」

「大丈夫か？ 酷い面だぞ、兄ちゃん。」

まだ半分寝ている脳を起こすべく、金の巻き毛越しに頭を振れば、自分が今見知らぬ家のベッドに寝ている事が解った。周囲には人だかりが出来ていて、先程からずっと自分を眺めていた様だ。その中には見た覚えのある顔がある。確かあれは隣村の人間だった筈だ。

「ここ、は……うっ。」

ジョージは上半身を起こそうとした。だが直ぐに鋭い痛みが全身を駆け巡り、半ばにも行く事無く再びベッドに戻ってしまった。苦痛だけで無く疲労感もある。丸一日農作業に励んだ後よりも酷かった。

「ああああ、無理するんじゃないよ。」

中年の女性が心配そうに彼を支える。他の者達も皆同様の表情を浮かべて彼を伺っている。

「だがその程度で済んで良かったな。何せ隣村は、」

「!!!!!!」

彼等の一人が言った言葉を耳に受け、ジョージの眼に焼き付いた光景が再び燃え上がった。

爆ぜる森。隠される太陽。一匹の紅い竜。背中への衝撃。そして竜が飛び去って行ったのは

「っ、おいっ……私、の……村はどうなったっ……何があったっ! !???」

呼吸するだけでも汗が零れる中、必死に胸を押さえながら彼はそう叫んだ。

じっとジョージを見ていた皆は一樣に視線を逸らし、何とも言い

難そうに小声で相談を始める。

その様子に、彼の中で漠然とした不安が芽吹いた。やがてそれは一向に終わらぬ密談と共に徐々に大きく茂り、奇妙な確信となって彼の心臓に纏わり付く茨を成して行く。堪り兼ねてジョージは言った。

「誰か……誰でも、いいつ……教えて、くれ……村は、どうなったつ……!!」

彼の余りの剣幕に、皆の声が一斉に止まった。

先程よりも強い不安を醸し出す重苦しい沈黙が辺りに漂う中、先程の女性が唇を開いた。

「……あんたん所の村が燃えてるのが遠くからでも良く見えたよ。見た事も無い化物が飛んでるのと一緒だね。それから酷い雄叫び……あれはこの世のものじゃない、悪魔の叫びさ。あたしたちは怖くって怖くってさ……家に閉じ籠ってがたがた震えてたんだよ。で……叫びが止んで、外に出た。誰か隣村を見て来い、って……若い衆が向かった。その途中であんたが畑に倒れてるのを見つけてね、ここまで運んで来たのさ。」

女性の言葉を聞いている間に、ジョージの表情はどんどん薄れて行く。最後には一切の感情を見出せない、完全なる無表情となった。それは正しく絶望の表情だった。余りの痛々しさに、誰も直視する事が出来ない。

「……そんな馬鹿な……。」

暫くして、ジョージはそうぼつりと呟いた。と、同時にがばりとベッドから起き上がり、外へと歩いて行く。皆は止めようとしたが出来なかった。どうやって止めるべきか、いやどうやったら止まるか解らなかったのだ。

石組みの家を出た途端に、ジョージはがくりとつんのめる。歩く事もままならないのだ。だが、立ち止まるうとはしない。道端で拾った木の棒を杖代わりに、外に出て来た皆の視線を背に受けながら一歩一歩歩いて行く。

行かなくては。

動ける様な体ではない。だがその一念が彼を動かしているのだ。

ジョージは照り付ける午後の日を受けながら、畦道を、平原を進んで行く。変わり映えのない平坦な野原に、似た様な形になって流れ行く雲は時間の感覚を狂わせる。一生辿り付けないのではと言う焦りが彼を取り囲んだ。

だが進む以上は何時か辿り付くものだ。たとえ辿り付いた先が望まぬ現実であれ、何であれ。

小高い、と言っても実際は大した事も無い、丘を越え、彼はようやく自分の村へとやって来た。

正確には、自分の村であった所に。

その場所には、かつてジョージがそこで暮らしていたと言う記憶を思い起こさせるものは殆ど残っていないかった。辛うじて半ば炭と化して倒れている木の柱や焼け焦げた石の山が、前は家であったと思わせる。その程度であった。後は全て煤と灰の山へと変わり果てている。

無論、生きている者は誰も居なかった。動いているものすら皆無である。

呆然と立ち尽くして、辺りを眺めていたジョージはよたよたと歩き始めた。

あの場所へ、己の記憶が正しければ我が家があった場所へ行く為に。

もしかしたら、と言う期待があった。自分が無事だったのだから、と言う希望があった。

それが全て儚い幻想だと解るのに、然して時間は掛からなかった。

ジョージは何も遮る事無く、彼方まで見渡す事が出来る平原の前で、どさりとその膝を付けた。

彼が倒れ込んだのはたった半日前に妻子に別れを告げた、扉であった所である。

涙は出なかった。怒りも、悲しみも沸いて来ない。何も感じない。何も解らない。

余りにも唐突で、不条理なこの事態に、彼の思考は凍り付いてしまったのだ。

胸にぽっかり穴が開いて、そこから風が流れ込んで行く様に、ジョージの中にを虚無が流れて行く。

「サロメ……カラム……」

唯開いているだけ、と言う様子の唇から、今はもう居ない妻子の名が告げられる。それに応えるものはここには、いやこの地上の何処にも存在等していないにも関わらず、否、だからこそ彼は言わずにはいられなかったのだ。

それからジョージは隣村で飯の暮らしを送る事となった。

あの中年の女性が部屋を用意してくれた。他の者達も何かと彼の世話をしてくれる。

だがジョージは抜け殻同然だった。何もする気が起きない。呼吸する事すら億劫で、だが死にたいかと言えば自殺する気すら起こらなかった。思考も散漫であり、一日何をしていたのかもおぼろげである。話しかけられてもろくに応えられず、応えるのにも数秒の時差が生じた。自分が今、果たして生きているのかどうかすらもあやふやだ。

それでも周囲の村人達は渾身的にジョージに接した。彼があこの村での唯一の生き残りであり、そしてその妻子を失った事を皆知っていたからだ。だが、それでも彼は良くなる所かますます虚無的な生活を送っていた。

そんな彼が変わるのは、竜が舞い降り村が消滅してからおよそ一カ月後の事である。

当初皆は詠国議会及び詠国軍による竜討伐に期待していた。既に役人がこの地を訪れ、調書も取っている。何時自分達も襲われるか解らない状況だ。ジョージの事もあり、皆軍馬の嘶きが聞こえる時

を待ち構えていた。

だがその時は一週間、二週間、そして三週間経ってもまだ来なかった。

痺れを切らした村人達は、再び訪れた役人に問い詰めた。一体、^{ロンドン}論議では何をしているのかと。

それに対して返って来た答えは、驚くべきものだった。

議会は今、竜を退治するか、或いは捕獲するかで二分していると言う。確かに竜の实在は認知されているが、しかしその個体数は世界的に見ても限り無く少ない。目撃情報すら稀である。更に、詠国内での発見は今回が初だったのだ。故に何とかして生きた個体を捕獲するべきであると言う意見が持ち上がった。そしてそれに対する様に、いや四の五の言わず早急に退治するべきであると言う意見も上がって来る。

この対立は自由・保守両党の内部でも起こり、現地の者達を無視して学者、軍人、記者、貴族、市民達をも巻き込んだ論争が繰り広げられていると言う。正に『会議は踊る、されど進まず』である。元々存在した都市圏と地方圏の違いに、一ヶ月前のあの日以来竜が姿を消してしまった事がそれに拍車を掛けた。

農村の荒廃は火事が原因であり鳥か何かを竜と見間違えたのでは等と言う者までいると言う話に、村人達は憤慨した。しかし詠国は、議会制民主主義の時代である。話し合いが解決しない以上、どうしようも無かった。

それでも納得が行かないと役人に食って掛かる村人達を尻目に、思案に耽る者がいた。

ジョージ・サリンジャーである。

図らずも村人達の熱狂的行動は、彼に冷静な思考能力を取り戻させていた。

彼は考えた。国は何もしてくれない。例え村人達が何と言おうとそれは変わらない。

ならばどうするか。動くのをただじっと待つのか。勇猛果敢な軍

人達が榮譽を獲得しに来るのを？学者達がただ己の為の生きたサンプルを欲するのを？記者達が自社の新聞の記事の為に躍起になり、市民達が酒の肴として、貴族達が話の種として面白半分口にするのを？そんな事をしている間に、何時この村が竜に襲われるか解らないし、自分の妻子を奪った竜をそんな風に扱ってもらいたくは無かった。あれには相応しい最期がいるのだ。

そして彼の思考は結論へと辿り付いた。

他人に等任せてはられない。奴はこの自分自身の手で倒さなければならぬのだ。

それは一個人の考えとしては馬鹿馬鹿しく、常軌を逸したものだ。ただらう。狂気と呼んでもいい。

だがそれは、何もかもを失っていた彼を動かす動機としては充分過ぎるものだった。

そうしてある日の夜、彼はこっそりと馬を借り受けると、北へと目指して村を出て行った。

瞳の奥に、夜の闇よりも暗い情熱を秘めて。

第四章

醒歴 1880年 六月 詠霧趣 イギリス 論曇 ロンドン 某貧民街 スラム

大詠帝国首都、論曇。

ここ程に、歴史と発展を兼ね備えた都市は無いだらう。

ドイツの鐘琳、フランスの風蘭守の華璃、イタリアの至梨啞の路磨、アメリカの阿真利火の新曜、日本の塔京等、世界には幾つも著名な都市が存在し、またそれぞれに特色もあるのだが、論曇には適うまい。

古代路磨時代に築かれたこの都市は、十七醒紀に宗教改革と経済発展により急速に成長を遂げた。その後起こった大火によって一度は壊滅状態になるが、逆にそれは中世都市としての汚辱と混乱を焼き払い、近代都市へと至らせる第一歩でもあった。そして再建された論曇は世界のどの国よりも早く産業革命を迎えた詠霧趣の首都として、更に進歩していった。

そして現在の論曇は、数多の国からやって来た人々が犇き合う大都市、太陽の沈まぬ国の中心地として燦然と輝いている訳なのだが、その発展は必ずしも良い方向だけに進んだ訳では無い。かつての論曇大火が進歩を齎した様に、産業革命の波は負の要素をも持ち込んだ。

その一つが蒸気機関より排出されるスモッグによる大気汚染である。史上最も早く産業革命を迎えた国はそれと同じ位早く、この人体に多大な悪影響を与える現象に悩まされる事となった。

更に時代は進み、土吉帝国が生み出した稀代の天才達『七人教授』（セブンマスターズ）の一人、ハンス・エーヴァルトによって蒸気機関を超えた蒸気機関、恐るべき熱効率を誇りながらもその縮小化に成功した『超蒸機関』が生み出され、今の蒸気文明を支える礎を築いたのだが、彼とその発明を以ってしてもこの悪煙だけはどうしようも無かった。蒸気機関に頼る以上、これは避けられぬ事であっ

たのである。

そして、この頃から論曇は『霧の都』と呼ばれる様になる。この霧とは即ちスモッグに置いて他ならない。勿論本物の霧も発生するが、それよりもスモッグの方が酷かったのだ。かつては『竜洞』と書かれていたロンドンが、『論曇』と言う字を当てられる様になったのもこれに起因する。

それ程までにこの都市の大気汚染は酷いものだったのだ。

だが問題だったのは公害だけでは無い。負の要素はもう一つあった。貧民街^{スラム}である。

世界中に植民地を持ち、その規模で言えば世界史上最も広大な大詠帝国は、当然ながら各国からの移民が絶えなかった。多くの者が貧しさから職と食を求めて、貿易港でもあった論曇へとやって来るが、貧困故にまともな勉強を受けておらず、詠語もろくに話せない者達が大勢居た。そんな彼等が真つ当な職業に付ける筈も無く、低賃金の労働者として搾取される道具として扱われ、それに耐えかねて犯罪に走る者も少なくなかった。

更にこの人種の坩堝は、保因者^{キャリアー}の大量発生をも招いた。何処から来たのかも定かでは無い者達が運んできた得体の知れぬ『何か』に、不衛生な環境で道德の欠如した生活を送る貧困者達は冒され、化物同然の存在へと変異して行った。これにより犯罪率の急激な上昇が起こったのは言うまでも無く、法整備を行われた警察機関に優秀な私立探偵達が居なければ貧民街は更なる拡大をし続け、やがて保因者でも無い一般人は生きて往来する事も出来ぬ魔都と化していただろう。

この様に世界に栄えある大詠帝国の首都は、その実多くの問題を抱えた街でもあった。

今もまた人工の霧に覆われ、瓦斯灯が無ければ眼前の視界すら覚束ぬ石畳の街路を、少数の紳士淑女を除く多数の者達が、今日の不幸と明日への打算を胸に進んで行く。

その中に、一種異様な雰囲気を持った男が居た。

その男は薄汚れた外套を深く着込み、人々が決して進まぬ方向へと確かな足取りで歩いて行く。かつては整えられていたのであろう口髭は乱れに乱れ、金髪の巻き毛も伸び切り歪んでいる。

一見すればそこいらの酔っ払い同然の姿だが、しかしその眼の奥に宿った炎だけは違っていた。夜の闇よりも暗く淀みながら、視線は確としたものであり、ぎらぎらと妖しく輝いている。

賢明な読者諸君ならば、彼が何者であるのか察せられた事だろう。そう、ジョージ・サリンジャーだ。

彼は今、普通の者ならば決して行かぬ場所、論曇東部の貧民街が奥深くへと向かっていた。

ここより三ヶ月前、彼は故郷のあるサマセット地方から、狂気とも呼べる思考によって誘われ、論曇へとやって来た。そう、即ち己が妻子を奪った竜を自らの手で倒すが為に、倒せるだけの力を得る為に。

論曇へとやって来たジョージは今日までの三ヶ月、日銭を稼ぐべく労働に精を出しながら、酒場や珈琲ハウスへ行った。人々へ熱心に竜やそれにまつわる話を聞かせるようせがみ、新聞を教科書として読み書きを学んだ。殆ど何も解らなかつたが、大詠帝国図書館にも行った。劣悪な環境の中、不慣れな事を夜遅くまでしたが為に、彼の心身は日に日に疲労していったが、熱意だけは消えなかつた。

一体一個人で何が出来るだろう、と思われるかもしれないがしかし、彼は本気であつた。無論、社会が何もしてくれないと言う理由もある。竜があの日以来姿を目撃されおらず、村も襲撃されていなくともあつては、もっと他の問題に関心が行くのは当然と言えば当然であろう。だが、それだけでは無かつた。最初から宛てがあつた訳では無いが、論曇に来て調べて行く内に一つの力を、その方法をジョージは知つた。

ワン・ウェンロンと名乗つた胡散臭い架橋……漢字で王の文の竜と書くと言つが恐らくは偽名だろう……から聞いた話である為何処まで信じていいか、竜はそれ自体独立した生命では無く、爬虫類乃

至は鳥類の保因者では無いかと言う説があると言う。成る程、竜が発見されたのは近代であり、それは大航海時代以降の事である。人間が変異するならば他の生物が変異する可能性だってある。ただこの学説は、そもそも保因者もといその彼等を変異させた因子とは何なのか、が解っていないが為、あくまで可能性の一つに過ぎなかった。

ジョージは昼間であるにも関わらず薄暗く、塵芥に汚れ、荒み切った路地を進んで行く。

この辺りは『イースト・エンド』と呼ばれる、論曇屈指の貧民街である。一生修復されないだろう壁に覆われた壁が左右に続き、歩く道の上には瓦礫や木材、その他良く解らない塵が石畳の代わりとなつて置かれていた。役割を全くといていい程果たせていない窓や扉からは底知れぬ深遠が覗け、その闇の中から得体の知れぬ何かが瞳を爛々と輝かせ、見慣れぬ侵入者の動向を伺っている。そして論曇中、いや植民地を含む大詠帝国中の汚物を掻き集めた様な悪臭が容赦なく鼻に飛び込んできた。

その様な場所であるにも関わらず、ジョージは顔色一つ変えないで進んで行く。生きる為ならば文字通り何でもやるこの住人達も、その表情に宿った気概を感じ取ったのか、ただ見ているだけで手出しをしようとはしなかった。

やがて彼は今にも崩れ落ちそうな一軒の建物の前に立った。一体何時からそこに建っているのかも解らぬその建物の入口は、急勾配な階段を何段も降りた地下にある。ジョージは躊躇せず降つて行った。

竜も保因者であると言う学説が実際正しいかどうかは解らない。だが、その可能性が考慮されたのは、時期的な関連だけではあるまい。保因者と言う存在が、竜に匹敵する様な力を持っているからだ。勿論、全ての保因者が力を持つ訳では無い。しかし、持つ者も確かに存在するのである。

保因者。変異した人間。人であつて人で無い者。人外の存在。あ

る日突然、或いは生まれた時から他人と違う者達。太古の怪物、或いは中世の悪魔……詠国内で種として最も有名なのは『吸血鬼』であろう……一言で言えば化物だ。

そんな存在に、竜も同じであると言うその存在に、もし自分が成れたならば

冥府へと行くオルフェウスの様に光指さぬ階段をジョージが降り終えると、その目の前に木組みの扉が立っていた。表面に消えかけて良く解らないが、奇怪な紋様が描かれている。

保因者に興味を抱いてから、彼は竜では無く保因者について知るべようと夢中で行動した。殊に自分がそうなるにはどうすれば良いかを人々へ執拗に聞いた。それも力を持った保因者に、だ。唯の無力な保因者等、今彼が居る貧民街にはそれこそ腐る程居る。因子は体液を通して他者へと移るのが、保因者と非保因者による性交と言う無数の実例によって証明されていた。だから保因者になる事自体は容易なのである。それが正に保因者が大航海時代から皇州全土へ急速に出現した理由でもあるのだから。

しかし、ジョージが求めたのは竜に対抗し得る力を持った保因者である。肌の色が変わり、髭や髪の色が増減し、太陽の光を忌み嫌うだけで、それ以外は常人と変わらぬ者になど成りたくは無かった。復讐心に染まりながらも今だ残っている宗教心によって、そもそも保因者になる事自体躊躇されると言うのに。

そこで彼は力ある保因者を求めて駆けずり回った。そしてつい先日、ある噂を耳にした。

その噂の場所こそ、ここイースト・エンドの奥深くにある建物である。ここには力を持った本物の『魔女』が住むと言う。彼女はただこの地に何も無かった頃、古代路磨人によってロンディウムが築かれようとする頃に産まれた。二千年近い間に知識と人脈を蓄え、論議の奥深くで隠れ家を変えながら、訪れる人々の願いを何らかの代償によって叶えるのだと言う。ただし、とんでも無く気分屋であり、彼女に関わって無事で居た者はいない、とも言われた。

それが本当かどうかは解らない。嘘であるかもしれない。しかし可能性はあるだろう。

彼の御方が生まれ出でるより以前から生きていると言うその魔女が、保因者であると言う可能性が。そして願わくば、その力を我が者に出来ると言う可能性が。

ジヨージはふうと浅い溜息を付くとドアノブを掴んだ。扉に叩き付ければ、直ぐに声が返って来る。

「へえへえ、どうぞいらっしやいませ。鍵は開いておりますから。しわがれた老婆の声だった。どうやらここまでは噂通りであるらしい。その真偽の定かはこの中にある。それを見定めるべく、彼は一言返事をしながら、ぐいっと扉を開けて、中へと踏み込んだ。

第五章

建物の中に入ったジョージ・サリンジャーは、そこが魔女の隠れ家である事を確信した。

その内装を一言で言うと、『魔女の厨』である。

薄暗く、光源は僅かに蝋燭数本。その明かりに照らされて、所どころに怪しげな由来来歴を持っていそうな道具が山と詰まれ、かび臭い古書がその悪状態を気にもされぬまま塔の如く立っているのが見えた。辺りには腐り切ったチーズの様な匂いが立ち込め、ジョージは思わず眉を潜めながら、ガラクタの脇を通って奥へと進む。天井は低く、部屋も狭かったが、道具を崩さない様、慎重になり、移動には偉く手間を取った。

作り物……と信じた……骸骨にキスしそうになったのを何とか避けながら、ジョージは漸く多少開けた所に出た。そこにはひん曲がった脚の机と、座れば崩れそうな椅子が二つ置かれており、奥の方に一人の老婆が座っている。この部屋にある物達に負けず劣らない老いと汚れを蓄えた、一目見るだけで不快感を催させる人物だ。

老婆はジョージがやって来た事に気付くと、何十年着つ放しなのか解らないフードを取って、にこやかに笑った。尤もその歯の殆どを喪失し、黄色く変色した歯茎をまざまざと見せられて、『にこやか』とはとても思えないだろうが。

「いらつしゃいませ旦那様。ささ、どうぞそこにお座りになってくださいまし。」

囁く様なかすれ声に一瞬何と言ったのか解らなかったが、直ぐに理解してジョージは椅子に座り、老婆と対面した。座り心地の悪い椅子が軋み声を上げる中、老婆はさて、と一拍置いてからこう言った。

「ここまでやって来たと言う事は、ここがどの様な場所であるか知っていると云う事でしょうな。私は知っての通りの魔女……モルグ、

と名乗らせて頂いております。旦那様は何とお呼びすれば宜しいですか？」

ジョージにはどう言う意味か解らないが、モルグとは奇妙な名前である。だが、相応しいとも思えた。

「私はジョージ……ジョージ・サリンジャーだ。」

「ジョージ様で御座いますか。成る程成る程。」

何が『成る程』なのか解らないが、モルグはそう言いながら、「三頷き、そしてこう続け様に言った。

「それで、ジョージ様。貴方は一体何用でここにおいでになったのですかな？」

そうら来たぞ、とジョージは余計な思考を頭の中から払い出すべく、すつと瞳を閉じた。ここに来てまだ時は経っていないが、それでもこの人物が奇怪な、それこそ噂に近い人物である事は解る。何か粗相があつてはいけない。

彼は瞳を開け、モルグをじつと見つめながら徐に言った。己の願望を。燃え滾る黒い炎をその瞳に宿して。

「私を『保因者』（キャリアー）にして頂きたい。」

低く静かに紡がれた言葉の奥に籠った熱に気付いたのだろう、モルグの顔がぴくりと動いた。彼女はあの嫌な笑みを浮かべながら、ジョージを試す様な、その人間性を値踏みする様な眼でじろりと見つめる。

彼はその視線を真正面より受け止めながら続けた。

「それはそれは……しかし恐れながら言えば、この国に、この論曇ロンドンに保因者等腐る程いますよ、勿論字義通りに。ただ保因者になりたいたのであれば、そこらの売春婦相手に一発かませばもうなれましようぞ。」

「そんな安物に興味無い。何故私がここを選び来たのか、あなたになら解る筈だ。」

「それは買いかぶりと言うもので、ジョージ様。私には皆目……一体全体何故で御座います？」

「私は力ある者になりたい。誰よりも、何よりも強いものに。」
「それはまた何故に？」

執拗なモルグの問い掛けに、ジョージは終止符を打つかの様に断言した。

「竜を倒す為に。」

意外で馬鹿げた、それでいて真摯な答えに魔女の老婆の顔からへつらいの笑みが消えた。

「……何故竜を倒したいのです？」

この質問に、ジョージは一瞬躊躇った。こんな者に変に勘繰られたくは無かったからだ。

同時に思い出してしまったのである。屍すら残っていないかったあの荒廃した故郷の風景を。

だが言わなければ話は進まない。押し寄せてきた吐き気を堪えつつ、彼は言った。

「竜は私の妻子を奪った。その為にだ。」

「……復讐、で御座いますか。」

「ああ……私自らやらなければならぬ事なんだ。」

「……何があっても、で？」

「……何があっても、だ。」

そう言いながら、机の下でジョージの拳がぐっと握りこまれる。視線が下がり、薄汚れた木目に注がれた。

モルグはその様子を相変わらずじいつと見つめている。そして、少々の時を置いてから言った。

「竜に復讐だなんてまるで神話か伝説ね、この時代には相応しく無いわ。でも面白い。凄く、面白いわよ、それ。」

その唇から紡がれたのは、妖艶にして妙齡な女性の声だった。

はっとジョージがモルグへ視線を戻すと、彼女の姿は一転していた。

そこに座っていたのは、見目麗しき貴婦人である。縦巻きにロールされた淡い緑色の髪が美しく、それと全く同じ色をした瞳が、細

く長い光を燐と湛えていた。服装すら、何時社交界に出てもおかしく無い緑色に統一されたドレスへと変わっている。みすばらしいフーの面影等、一切れも存在しなかった。

「……あなた、は……一体何者だ。」

この厨に全く持つて相応しくない人物の唐突な出現に、ジョージは驚く自分を隠せずに居る。

「あら、既に名乗ったじゃない。モルグ、って。でも、今この姿の時はルフィナと名乗っているわ。ルフィナ・モルグ、合わせてそれがこの私のフルネームよ。覚えておきなさいね、ジョージ・サリンジャー？」

そんな彼を見ながら魔女ルフィナ・モルグは妖精の様に可愛らしくも意地の悪い笑みを浮かべて応えた。

第六章

「ああ……いや……しかし、驚いた。まさかそんな……本当に、魔女なのか。」

ルフィナ・モルグが改めて自己紹介するの上空で、ジョージ・サリンジャーは彼女の全身をしげしげと眺めた。見れば見る程、先程までの姿とは掛け離れている。一体如何なる魔法を使ったと言うのだろうか。

彼女自身それを自覚しているのだろう、たわわに実った胸を寄せ様に腕を組みつつ、笑って言った。

「余り婦人^{レディ}をじろじろ見るものでは無いわよ。ま、驚くのも解るけどね。ええ、そう。宗教とかそう言うのを抜かせば、貴方が思っている様な魔女ね、私は。と言っても、使える魔法は二つだけ。死なない事と形を変える事しか出来ないけど。まあそれだけで充分とも言えるわね、生きて行く上には。因みに名も姿も本物では無いわ。今の流行に合わせて見たんだけどどうかしら。まあ、本当の姿を忘れちゃったって言うのもあるけどね。何せ二千年も前に生まれたものだからね。嫌になっちゃうわ、外見だけ若作りしたって中身は二千年のおばあちゃんなんだから。」

そこまで一気に言い終えると、彼女は独りでくすくすと笑い出した。紅く熟れた唇から綺麗に整った白い歯が覗く。ここまで流暢な語り口になったのは、今まで老婆の姿であった反動からだろう。何にせよ、その余りの早口に、ジョージはただただ嗚呼とかほうとか言う相槌を打つ他無かったが。

「さ、て、と。それで、貴方は保因者^{キャリアー}に成りたいのだったわねジョージ。保因者保因者、嗚呼味気ない名前。私その名で呼ばれるの嫌い。エルゼアール・ジュシーも、風蘭守人^{フロンヌ}ならもうちよつと詞的に素敵な名前を付けたって、ね。そんなに恋人を失くしたのが悔しかったのかしらあの学者貴族は。貴方はどう思う？」

やっと本題に入った、と思えばこれである。どうやら長く生きる事で、人間の会話術は退化するものらしい。ジョージは、ルフィアの一方的な会話を諫める様に咳払いしつつ、ふつつつと湧き上がる苛立ちを抑えながら言った。

「名前等どうでもいい。必要なのは力だ。竜を倒す為の力だ。さあ教えてくれ。あなたならくれるのか？力を。」

「いいえどうでも良くは無いわジョージ。名前はその存在そのものを指し示し、運命すら左右してしまう。それ位に大事なもののよ、カッパドキアの悪竜を葬った騎士殿。馬鹿にするものでは、無いわ。」

ルフィナはジョージの言葉を軽く受け流しつつ、すつくと立ち上がった。そのまま周囲に散乱する道具を器用に避けながら、ジョージの元へと近付いて行く。彼は思わず立ち上がり、身構えながら後退った。

「あら、復讐の戦士が今の私みたいな女にうるたえちゃ駄目よ。そこはもつと毅然としていなくちゃ。」

よく言う、と心の中でジョージがそう思った瞬間、その顎が白く伸びた指に掴まれる。突然の行動に彼は離させようと首を振り払った。汚れ一つ無い綺麗なそれはしかし、恐るべき力を持って離さない。

ジョージの顔が恐怖で引き攣る中、ルフィナは妖しげな微笑を浮かべると、もう片方の手で首を抑えた。

そして彼女は一気に腕を引き込むと、ジョージの唇にしゃぶりついていた。

「……っ。」

まずは驚愕が、そしてほんの少しの歓喜と共に過大な嫌悪感がジョージの体を直走った。彼はルフィナを離そうと手を掴むが、腕も指もびくともしない。それ所かますます力は増して行く。その光景は、緑の模様を持った白蜘蛛と、その哀れな犠牲者を連想させた。

同時にルフィナの舌が、僅かな隙間に入り込む蛇の様にジョージ

の唇の間を通り抜け、ねつとりと彼の舌に絡み付く。唇が蛸の吸盤みたいに唇に吸い付き、滴る唾液が奔流となつて喉の奥へと送り込まれた。奇妙に甘いその液体を、思わず飲み込んだ瞬間に、ジョージの背筋にぞわりと鳥肌が泡立った。最早我慢も呼吸も限界である。彼は渾身の力を込めて歯を立てると、ルフィナの舌に噛み付き、それを食い干切った。

「ん……つ、う。」

予想外の反撃だったのだろう、ルフィナの拘束が緩んだ。その隙を見逃さず、ジョージは両手を押し出して彼女を突き放す。後退りする中で、椅子にぶつかり、がたりと倒れた。二人の間に距離が出来、そして彼は机に手を置き、もう片方の手で紅く染まった唇を拭う彼女を睨んだ。

「一体……何を考えているんだつ。」

そう叫ぶジョージの顔は真つ赤に染まっていた事であろう。キスは欧火（おうか）ヨーロッパ 皇路霸アメリカと阿真利火を合わせてこう呼ぶ）では親愛を込めた挨拶として一般的な意味合いを持ったが、今は明らかにそう言う類のものでは無かった。そして彼は、元々妻一筋の敬虔なる人間である。

「ん……キス一つで大袈裟よ、貴方。もっと楽に考えなさい、日本ジャパン人じゃないんだから。いや、二十年前にここに来たサムライだつてもう少しまともな反応をしたわよ……全く、折角変異させてあげたつて言うのに。」

ぺつと血の唾を吐きながら、ルフィナは怒る彼を嗜める様にそう言った。手を退かせれば既に血は跡形も無く消え失せ、一瞬で元通りとなった真つ赤な舌が踊っているのを垣間見る事が出来た。

だが、ジョージが気になったのは当然ながらそこでは無かった。

「変異させた、だと？それは一体、どう、言うこ、と。」

訝しがり、問い掛けを口に出そうとしたジョージは、全て言い終える前にばたりと倒れ込んだ。

全身が熱かった。自分が大窯となり、煮え滾るスープをその内に

抱えている様だった。流れる内から汗は湯気立ち、じつとりと衣服が肌にへばりつく。その肌に冷たい床が心地良い。心臓が熱き血潮を走らせながら高鳴った。

そんな彼の側にルフィナが立つ。へばり付くジョージを蟲の様に見下しながら。

「全て貴方が望んだ事でしょう？ 竜を倒したいと。その為の力が欲しいと。強き者に、即ち保因者になりたいと。だからこのルフィナが叶えてあげたの。私の唾液を飲ませて、ね。私が飲んだ葡萄酒、私が食べた肉、私が吸った空気、私が舐めた一物、その二千年分が凝縮してた液体よ。さぞ凄いい事になってるでしょうね、その体の中は。ねえジョージ、どうかしら？ 自分の奥底から己の全てが変わって行く感触は。皮膚が裏返って、内臓が外気にさらけ出される様な気分は。始めて童貞を失った、或いは処女を散らせた夜みたく滾るでしょう？」

破廉恥な、と罵り返したかったが今のジョージには何も言う事等出来なかった。思考が纏まらず、視界すら歪む。これが保因者に、人ならざる者になると言う事なのか。彼の中で後悔の念が浮かび出した。

その耳に、止めとも言える貴婦人の声が届く。

「でも、まだ完全じゃないのよね、それじゃ。」

「ど……言う……事、だ……。」

ジョージは指に力を込め、首を上げながらぐつと喉を震わせ、漸くそれだけ応えた。

「保因者の……嗚呼もう、嫌な名前……因子が体液で移るのは知ってるのかしら？ まあどちらでもいいんだけど、体液って色々あるわよね。唾液以外にも汗に涙に、胃液に愛液 e t c e t c ……でも一番強く多く因子を含んでいるのは血液らしいの。でも私の血は濃いから、慣れてない人間だと耐え切れないのよ、変異の熱が凄すぎで。だから最初に唾液を送ったの、体を慣らさせる為だね。今の状態なら何とかなるでしょ。嗚呼、因みにこの方法は吸血鬼達が仲間

を増やす時に取る方法。血を吸いたい欲求、つてまあ性欲なんだけど、それに駆られて喉元に噛み付き、唾液を送りながら欲求を満たした後、今度は自分の血を飲ませる事で、相手を完全に同胞にするのよ。それを行わないと、ただ性欲ばかり肥大化して、本物と比べたら大した力も持たない下賤な者になっちゃうの。今論曇に沢山いる吸血鬼の大半はそれね。皆、ただの性欲の捌け口にされた哀れな犠牲者つて訳。」

聞き手を無視して、だらだらとそう言いながら、ルフィナは右手の指を一直線に上へと向けた。その皮の下で細胞が変化し、骨が軋み、筋肉が歪む。一瞬の間も無く、整っていた爪は一フィート近く伸びた。ナイフの様に鋭く尖るそれを、左手首に向けてさつと振るうと、どろりと濃厚な紅い液体が傷口より溢れ出る。

そこからルフィナは、ジョージの側にしゃがむと、元に戻った右手で頭を支えながら、脱水状態にある彼の唇に向けて左手首を近づけた。ぽたぽたと、蠟の様な血の滴が頬に当たり、跡を残す。

「さ、お飲みなさい。聖ルフィナの血を、葡萄酒だと思ってぐつと一息に。」

眼前に紅い傷跡が向けられる中、ジョージは言葉こそ発しなかったが、一瞬躊躇いの表情を浮かべた。血を飲むと言う行為に背徳感を受け、虚ろな脳裏の中に残された信仰が口を付けるのを思い止まらせたのだ。

「あら、何を躊躇ってるの？信仰心？くだらないわ。思い出しなさいな、貴方は自分の脚でここまで来て、こうなる事を自身から望んだ、復讐の為にね。その時点で、貴方は信仰を捨て去ってしまったているのだと、何故解らないのかしら？知恵の木の実は齧り掛け、今更ヤハヴェは許しちゃくれないわ。さあ、それでもまだ拒むつもり？信仰を取るつもり？『何があつても』と言った貴方の台詞を嘘偽りにするつもり？」

その些細な拒絶を、ルフィナは否定する。聖母の如き優しげな笑みを持って、蛇の言葉を囁きながら。

ジョージはう、と言葉に、もとい思考に詰まった。どろどろに溶けた鉄の様な脳味噌で、彼女の否定を否定する言葉等思い浮かばない。いや寧ろその通りであると言う肯定の言葉が脳内で浮かび上がった。

つまらない信仰等捨ててしまえ。サロメとカラムを奪った竜の事を思い出せ。

竜を打ち倒す力を得る為に論曇までやって来たのでは無かったのか。

頭の中で紡ぎ出される言葉に、感情が呼応する。虚ろな瞳に憎悪の光が籠り、衰弱していた体に力が戻り始める。二千年の血が齎した進化の炎は、彼の意思に従って、その体をより強固なものへと変化させた。この時点でもうジョージの体は人でありながら人では無い。保因者、人外の存在となったのだ。

後は仕上げを行うのみである。

ジョージは自らルフィナの左手を掴むと、その傷口に己の唇を押し当てた。まだ体力戻りきらぬ身であったが、その握力は常人を超えている。ん、と彼女の唇から呻き声が零れた。それを無視して、彼は舌を押し当てると、貪る様に血を啜って行く。一度血を吸ってしまえば、留めるもの等最早何も無く、力と性への欲求は止まらない。

ルフィナは、口髭を真つ赤に染めながら己の血を飲み干して行く。ジョージの頭を優しく撫でながら、彼が己の欲求と胃袋を満たし、再び訪れる進化の炎に身を苛まれ眠りにつくまで、その左手を差し出し続けた。

第七章

醒歴 1880年 九月 詠霧趣 イギリス 論曇郊外 ロンドン

世界都市としての喧騒からは無縁と言ってもいい論曇郊外。そこに廢墟の教会がある。

まだ作られてから百年も建っていないだろうに、一体そこで何があつたのだろう、周囲の者は誰一人近付かずこうとせず、噂話の中でも語られる事は無く、一向に壊されようともしない。人の出入りが無くなつた今はただ、歳月が蔦と成つて壁を覆い、年月が風を伴つて石造りの壁を削つて行くのみだ。そうやって廢れてから既に随分な時間が経っているのだろう、日中でも異様な雰囲気を醸し出している。今宵の様な雲一つ無い満月の夜ともなれば一塩だ。青白い月の光に照らされて聳え立つその姿は畏怖すら感じさせる。

尤も、神の家として機能しなくなつては畏怖等あつても意味は無いが。

その誰もいない筈の教会の中で、激しい呼気と剣戟の音が響いた。硝子等とうに失せて等しい窓から覗けば、月明かりの元で二人の影が躍っている。

どちらも月光しか照らすものの無い闇の中にあつて、その足取りに一切の淀み無く、二人の影は石畳の上を、蜘蛛の巣が巡る長椅子の脇を駆け抜けて行く。速い。影となつて見えるのは光源の所為ではあるまい。ここが廢墟の教会の中では無く、詠国では珍しい晴天の空の下だつたとしても、彼等はやはり影としか捉えられなかつただろう。並の人間の眼では追いつけられよう筈も無い。最早鮮明なのは音のみ、音速の舞踏である。

そして舞踏とは武闘に他ならない。

時に並び、時には離れる二人の影の間で、白銀の刃が煌いた。大気を切り裂き、同時に相手をも切り裂こうとする双刃は、それぞれ

相手の刃によつてその目論見を妨げられ、甲高い音を上げながら、赤い火花を散らす。

まだ空気中に小さく花びらが舞う間に二人の影は離れて行く。距離にして十ヤード程間を取つて静止した。

闇の中でその姿を見極める事は困難だが、二人とも男性の様だ。

片方は壮年の男性、もう片方は青年である。距離だけで無く年齢も離れたこの二人であるが、武器は共通だった。即ち刺突剣、レイピアである。

青年はそのレイピアをひゅんと払うと、男性に向けて構えた。鏡合わせの様に、男性も構える。

一拍の間を置いて、影が跳んだ、先に動いたのは青年の方、姿勢を低く保つたまま氷の上を滑る様に突き進む。男性が身構えた。十ヤードの距離をほぼ一瞬で埋めた青年がダンと踏み込み、レイピアを突く。それを身を翻しながら、己のレイピアで受け払う男性。そのまま回転しつつ回り込むと、彼は青年の無防備な背中に向けて、遠心力を保つたまま刃を振るつた。だが受け流されても青年は止まる事無く突き進み、白刃は空しく宙を掻いた。

更に踏み込み、背後から男性が突くのを、踵を返し振り返りながら、青年の刃が打ち落とす。重なり合つた刃は双方の上を滑り上がり、ガキリと鏢に当たつて静止した。くつと刃先を上へ上げながら鏢迫り合いの形に持ち込む二人は力と力をぶつけ合い、相手の剣を絡めとらんと鏢を動かしながら、視線を交わらせる。

くすんだ黄金の瞳と、隻眼の赤眼がそれぞれに相手の瞳を移し込む。

青年の瞳がかつと見開かれた。赤い光が強みを増し、強い呼気と共に彼は男性を押し出す。よろめき、後ろへと下がる中で生まれた隙を見過ごす筈も無く、青年はレイピアを突いた。男性側から見れば細い点にしか見えぬ刃先が喉元へと迫る。ちくりと蜂に刺される様な痛みを感じた瞬間、男性は跳んだ。同時に仰け反りながら、その場でぐるんと回転する。鼻先で刃を感じながら彼は、回転のまま

にそれを刃で払い、そして顎の下から蹴りをお見舞いした。全く想定外の動きに青年は対応すら出来ない。攻撃時の隙を逆に狙われ、彼は男性とは逆周りに後ろへと跳んだ。すたりと男性が見事な着地を決める中、青年はどんと無様に倒れる。

レイピアを振るいながら男性は、倒れ伏した青年の喉元に向けて先程とは逆に刃を向ける。優劣は決まった。だが青年は明らかにそれを認めていなかった。その褐色の顔に苛立ちの赤が増すと共に、彼は右目の眼帯を外す。

「お止めっ、ルイスっ！！！！」

正にその瞬間、暗闇に溶けていたかの様に唐突に、碧髪碧眼の美女が現れた。ルフィナ・モルグだ。

彼女はつかつかとルイスと呼んだ青年の元へ行くと、罰の悪そうに右目を抑える彼を見下ろしながら言った。

「貴方、今『邪眼』を使おうとしたでしょ。駄目じゃない、自分の三分の一も生きてない小童にそんなもの使っちゃ。全く、論議の汚泥が産んだバロールって自覚あるのかしらこの黒兎。洒落にならないでしょ。」

まるで母親の一方的な説教だ。ルイスは眼帯を戻しながら、ぼそっと反論した。無駄だと知りつつ。

「僕を買い被り過ぎだ。右眼を使わないと勝てないよ、こんなの。」
そしてその予測は正しかった。

「勝ち負けじゃないって何度も言ってるでしょ。試合でも決闘でも無いわよ、これは特訓。貴方が勝とうが負けようが、死のうが死ぬまいが、そんな事はどうでもいいの。重要なのはジョージが力を付ける事だっついうのに、」

実に酷い言い草である。ルイスは途中で耳を塞ぎ、そっぽを向いた。自分が今まで戦っていた相手の方へと。

ルイスの相手、即ちジョージ・サリンジャーは終始無関心だった。今もまだ喋り続けているルフィナを無視し、仏頂面を浮かべるルイスに一瞥もくれず、落ち窪んだ瞳を向けながらレイピアに付いた汚

れを黙々と拭いている。

ジョージがルフィナによって、保因者キャリアーに変異されてから、三ヶ月が経った。

二千年の時を生きる魔女の血液は、唾液と言う緩和剤を用いても彼の体を苛み、数日間の睡眠を必要とした。夢も見ない熟睡の後、ルフィナの隠れ家で目覚めたジョージは、自分が完全に人では無くなっていて事に気が付いた。筋肉の一筋一筋、細胞の一個一個から力が漲り、溢れてくるのが解る。彼の視界から闇は消え、全てが明るく輝いて見えた。物陰を駆けずり回る小さな鼠の心音すら聞き取れた。それでいて外見的に異常も無ければ、欠陥も存在しない。特異な能力は発言しなかったが、純粋な力ある存在に変わったのだ。

ジョージは薄汚いベッドの中で拳を握りながら高笑いを上げた。

これならば勝てる。あの竜に復讐を果す事が出来る、と。

そうして彼はすぐさま出ようとしたが、それはルフィナに止められた。

「貴方と同じ様に血を与えた者は沢山いたけど、完全に変異するまでに時間が掛かったわね。大丈夫だと思っけていても不調があったり、思わぬ所が変わってたりね。特に精神的に変貌しちゃった子は多かつたわ。心と体は不可分よ。丁度良い相手を用意してあげるから、体動かせて馴染ませなさい。」

そう言っけて彼女が連れて来たのが、先のルイスと言う青年である。先天的な保因者で、親元に捨てられた所を百年近く前にルフィナが拾ったと言う。どうやら保因者同士にも身分があり、ルイスは彼女ともどもその上流社会に名の知れた者であるらしく、姓は本人自身知らないらしいが幾つもの渾名を持っていると言う。尤も、ジョージにとつてはただの特訓相手に過ぎなかつたし、その素性等興味の欠片も無かつたが。

かくしてジョージは望まぬながらも特訓に励み、その力を蓄えて行つた。そして、遂にその力を発揮する時が来たのであろう。何故ならば、ルフィナがこの特訓場を訪れたのは始めての事であつたか

らだ。彼女は彼以外にも訪れる客の為に、何時もずつと隠れ家で……一度、場所を変える事もあったが……過ぎしている。

「でもルイスに勝てる様になったと言つのなら、もう調整もばつちりね。いらつしやい、ジョージ。外に、貴方が望んでいたものを色々と持つて来といてあげたから。」

予想通りにルフィナはそう言うと、教会の外へと出て行く。

ジョージもその後が続いた。ルイスは不機嫌そうに床を蹴っているだけで、着いて来る事は無かった。

外に出た途端、ジョージは眩しさに眼を細めた。今の彼の視力だと、深夜の満月は真昼の太陽と大差無い。新月の星明かりでも充分と言つ身でこれはきつい。彼は手で庇を作りながら、ルフィナの元へと向かった。

彼女は教会脇の木の下で、袖の太い東洋風の黒い服に山高帽を被つた華僑と話している。丸縁の眼鏡が実に怪しいこの人物を、ジョージは知っていた。魔女の噂を教えてくれた人物、ワン・ウエンロソである。どうやら顔馴染みであるらしい二人は、詠語では無い何か……恐らくあれが中国語なのだろう……で話していた。つまるところあれは噂でも何でも無い、正しく真実であつた訳か。ジョージは何か騙された気分になつたが、別に兎角言つつもりも無かった。

それよりも、二人の側に置かれた荷馬車の中にある白い布に包まれた何かの方に、彼の関心は向けられる。

「来たわねジョージ。さあ見るといいわ勝利と自由の息子よ。あの『極小要素の変身者』グレゴール・ゲルヴィーヌスに作らせた機械仕掛けのバルムンクよ。槍だからグングニルかしら。嗚呼、私つたら自分で名前が重要だつて言いながら忘れてたわ、それを言うならエクスカリバーか、ゲイボルグよね……まあ何でもいいわ、気に入ると思うから。」

そう言つてルフィナは白い布を優しく摩つた。ワンが袖に手を入れたつ一礼するのを横目で眺めながら、ジョージは馬車の元まで来た。そして布を捲ると、その中身を確認した。思わず、感嘆の溜息

が漏れた。

「これは……凄いな。」

「凄いでしょ？大枚叩いて作らせただけあるわ。流石『七人教授』
(セブンマイスターズ)の一人よ。」

七人教授が何者か知る由も無いジョージだが、包みの中身が素晴らしいものであるのは解った。正に機巧時代が生み出した神話の武器である。これならば、確かにあの竜を打ち倒す事が、復讐を果たす事が出来よう。

ジョージは微笑みながらルフィナに向き直ると、自分よりも二周り程小柄なその体を抱擁した。

「感謝するルフィナ。何から何まで君が居なければ果たせなかった。

「構わないわよジョージ。貴方はお金や時間じゃどうにもならないものを私にくれているから。」

一切の贅肉が無い胸の中で彼女はそう囁く様に言うと、すつと顔を上げ、唇を突き出す。ジョージは頷くと、赤く潤んだ唇にしゃぶりついた。ワンが厭らしい笑みを浮かべるが、構うまい。こんな事は、この三ヶ月で慣れてしまった。最初は義務的な応酬であったが、今では確かな快樂を望むべくして感じている。最早立派な情夫だ。

麗しき妖精をしかと味わう彼の淀んだ眼光には、血の海に浮かぶ朽ち果てた竜の屍が映っている。果たされるだろう復讐と勝利の幻想に酔い痴れながら瞳を閉じ、視覚以外の感覚を持ってルフィナを愉しむ事とした。

第八章

醒曆1880年 九月 詠霧趣西南部 イギリス サマセツト地方

サマセツトに位置する小さな街、グラストンベリー。

その近郊にある突き出た丘は、中世以来『アヴァロン』では無いか、と言われて来た場所だ。

アヴァロンとは、かつてブリテン島に実在したとされる伝説の王アーサーが不義の息子モードレッドとの戦で傷付いた体を癒し、眠っていると言う伝説の島である。その名は『林檎の島』を意味し、妖精の女王『モルガン・ル・フェ』を長女とする九人の妖精達が支配する一種の異界であり、また楽園である。彼の地で眠る王は、詠国が危機に陥った時再び現れ、人々を救うとされていた。

丘であるのに何故島なのか、と言うとかつてのサマセツト地方が湿地帯に覆われていたからである。何処までも延々と続く泥の海の中に突き出た丘は、古代の者達からすれば島に見えた事だろう。また十二醒紀頃、実際にグラストンベリーの修道院長らがこの丘を掘った所、『HIC JACET SEPULTUS INCLITUS REX ARTHURUS IN INSULA AVALLONIA』（此処アヴァロンの島にアーサー王眠れり）と言う文字が蓋に刻まれ、中に二人分の骸骨が入った棺らしきものが出て来たと言う。尤も、アーサー王の墓碑銘は『HIC IACET ARTHURUS REX QUONDAM REXQUE FURTESITURUS』（此処にアーサー王眠れり。かつての王、現在の王、そして未来に再び王とならん）とされており、見つかったものとは文章が違う為、眉唾では無いかと言われている。また棺が再び埋葬された修道院が、十六醒紀の宗教改革によって破壊され、廃墟になつてしまつた為に、今ではその真偽を計る事も不可能となつていた。だが親から子へ、友から友へと語り継がれて行く伝説に、嘘か真

かを問うのも野暮であろう。何せ大昔だ。現代を生きる人間にとつては最早唯の物語であり、生きるには関係無い事である。そう、関係無い。国の危機を排除すべく伝説の王が復活すると言われても民の不幸を救いに現れないと言うなら、自分には一切関係無いのだ。

遠くに見える丘を淀んだ黄金の瞳で見据えながら、ジョージ・サリンジャーはそう自虐的に思った。

手綱を手に取り、今は乾燥した平坦な野原を馬に乗って進んで行く。

国の為では無く己の為に、王の代わりに自身によってその苦悩を終わらせる為に。

その姿は正に中世の騎士さながらの物であった。全身を包む様に纏った外套の下には、金属プレートと鎖帷子によって何重にも補強された分厚い皮衣を着ている。並大抵の刃物はおろか、弾丸すら通さないであろう代物である。腰には気休め程度だろうが剣と銃、そして奇妙な形状をした金属の缶が二つ程通してあった。その背中には、自分の身長よりも大きい白い包みを背負っている。黒いベルトで止められたそれは先端に行く程に先細り、そして頭の近くで梃子レバのようなものが付いた柄が見え隠れしていた。

これらは全て二千年の時を生きる魔女ルフィナ・モルグの手によってジョージに与えられた物である。正確には彼女の手配に華僑の商人ワン・ウエンロンが応え、国内外の職人達によって造らされた物だった。彼女の心の内は計りかねたが、ジョージにとって復讐の為の力を与えてくれたパトロンのある事には変わりはない。アーサー王伝説に例えるならばマーリン、いや湖の貴婦人が。その名の由来を知れば、決して彼の王の伝説に例えたく無くなるだろうが。

その彼女から仕入れてきた竜再来の噂を頼りに、ジョージは故郷たるこの地までやって来た。離れてから半年も経っていないと言うのに、奇妙な懐かしさがその胸に宿っている。まるで何十年何百年も帰っていないかった様な錯覚。それがきつと、保因者に成ったと言う事なのだろうと彼は改めて実感している。自分が変わったのだと

言う事を。か弱き唯の人間では無くなったのだと。そう思うと、自然と心が滾った。

だがそんな気持ちとは裏腹に、不安もまたあった。果たして今の自分で勝てるだろうか、と言う心の揺らぎ。あの隻眼にして赤眼の青年ルイスと廃墟の教会で鍛錬に励んでいた時、そんな気は微塵も起こらなかった。ルフィナの寝室で朝を過ごした時には勝利の確信すらあったと言うのに。彼女と論曇ロンドンから離れて早数日間。敗北の予感日は増し募って行く。まるで夢から覚め現実に引き戻された様な嫌な感じだ。殊、故郷に足を踏み込んでからは特に酷い。

ジョージにはしかし、その不安の原因が何と無く解っていた。

それは、この故郷に満ちる『匂い』に置いて他ならない。ルフィナの血に宿った因子により彼の身体能力は強化され、その嗅覚は犬と同等か、それ以上のものとなっていた。だからサマセット地方に来て直ぐにその匂いに気が付いた。匂いは今までに嗅いだ事が無く、故に何かに例える事は出来ない。しかし、脳裏にはある種のイメージが湧き出していた。忘れられない、かつて彼の村であったあの場所の光景である。

そしてその匂いはここに来て、より一層強く濃くなっていた。彼が乗る馬もそれに気付いたのだろう、何処か様子がおかしい。まるで論曇のスモッグだ。余りの濃さに空気が汚染されている様だ。数日後には元に戻るとは言え、鼻をもぎとってしまいたくなる。だが、それは匂いの主に近付いていると言う事でもある。ここに戻った理由は無視する事の出来ぬ確かな筋からとは言え、噂によるものだった。だがもうその真偽を疑う気は無い。

居るのだ、と言う確かな手応えが感じられた。

やがてその足取りは、何処までも凹凸の無い平原が続く中であつて、ぽつんと佇む森へと向けられた。森、と言ったが、それ程大きくものでは無い。かと言って、林とする程小さくも無い。

その緑を構成する枝葉ががさりと揺れた。風等微塵も無い、初秋の晴天の日だと言うにも関わらずである。同時に、匂いの濃さが増

した。いや、唯濃いと言う訳では無い。明確な意思を持つかの如く、自分に向けてその密度を増させたのがジョージには解った。彼が相手の存在に気付いた様に、相手も彼の存在に気付いたのである。

どくりとジョージの心臓が高鳴った。待ち望んでいた時が迫って来るのを体が自覚する。彼はその保因者^{キャリアー}としての尋常ならざる力を持って手綱を取ると、森へ向けて馬を奔らせた。走るでは無い、奔るである。主人の意に応え、馬は黒い鬣を靡かせながら、風を追い越して行く。

そして彼我の距離が二十ヤードを切ったその時、正にその時、森の一部が爆散した。

第九章

中空に木々が舞い上がり、落ちてくる中を駆け抜けたジョージ・サリンジャーの眼に、赤い影が飛び込む。

衝撃が走った。

森から現れた影は竜であった。

六ヤード近い巨体。鍛え上げられた鎖鎧チェインメイルの様な、全身を覆う赤い鱗。鋭い五本の爪を生やした強靱な四肢。巨木と見誤ってしそうな程太く長い尻尾。蝙蝠に似た、全長の三倍はあるだろう一対の翼。そしてあの顔、蜥蜴と狗と馬を掛け合わせた様な顔立ちに宿った明確な意思。

誰が忘れられようか。誰が間違えられようか。

それは突如ジョージから全てを奪った理不尽の権化、あの真紅の竜に他ならなかった。

彼の淀んだ黄金の瞳の中に、憎悪の炎が燃え上がる。

だが、衝撃が走ったのは何も憎むべき相手の姿を見たからだけでは無い。

森から飛び出した竜が、彼と彼が乗る馬目掛けて疾駆して来たからだ。巨大な岩程もある体を震わせ、嵐の中に揺れる旗の様に尾を振り乱し、自分は猟犬或いは軍馬であると叫ばんばかり脚を動かしながら、真つ直ぐに掛けて来る。竜とはその雄大な翼を持って悠然と空を飛ぶもの、或いは突き出た腹を地面に擦らせながら傲慢さも露に這い行くもの。伝説伝承、そんな虚構から作り上げられたイメージは一瞬で形骸化した。

だが何時までも驚いた、で済まず訳には行かない。何を想い、感じたかは知らないし、興味も無いが、竜は怒り心頭と言った様子で咆哮を上げた。呼気とは名ばかりの暴風がジョージの顔にぶち当たる。両者ともに全力なのだ、その間等瞬く暇も無く埋まってしまふ。そしてこれは特訓では無い。試合でも決闘でも無い。生きるか死

ぬか、純粹に生存を賭けた闘争である。復讐と言つ理由はあがあるが、一度それが始めれば関係も無く、また元より開始の合図等存在しなかつた。

開幕の鐘も無く、騎士と竜の闘いが始まつた。

竜はもう一度長く尾を引いた咆哮を上げると、ぐわりと顎を開いたまま馬に喰らいかかつた。哀しげな嘶きが響き渡り、気付いた時にはもう遅い。閉じられた口の、牙と牙の間からぶしゅりと血が迸つた僅かにはみ出ていた頭部がぼとりと地面に墮ち、慣性の法則に従つてごろごろと転がって行く。つい先程まで平原を駆け抜けて来た者は、一瞬で汚らしい食べ残しと化した。苦痛か生理現象か、漸く動きを止めて横たわつた馬の首に、一筋の涙が滴つた。黒い瞳は空に燦然と輝く太陽を見据えながら、急速に光を失い闇を満たして行く。

最後の光が消え行こうとするその瞬間、その瞳に太陽と空以外の影が映り込んだ。竜の視界から太陽が遮られ、彼は狩つたばかりの獲物の味を堪能する暇も無く、億劫そうに頭上へと首を向ける。

遙か天空、元来鳥とそして竜たる己の場所であるそこに、ジョージが居た。竜の牙が眼前に迫つた時、彼は常人では計り知れぬ跳躍力を持つて天高く跳び上がったのである。しかし彼の背中に翼は無いのだ。一度跳べば、着地するまで身動きは取れない。その彼に向け、竜が血の糸を引きながら口を開く。全てを燃やし尽くす、息吹を吐き出さんが為に。ジョージはだが、その事を解つていたのである。彼が墮ちようとするその位置は、竜から見て丁度太陽の背後に位置していた。眩い後光によつて逆に眼を焼かれ、息吹を吐く事の出来ぬ竜の背中に、重力に引かれるがままにジョージが跳び乗つた。いや踏み乗つた、或いは蹴り乗つたと言ふべきだろうか。高所から低い所に至る時に生まれた力は、170ポンドと言ふ彼の全体重を支える踵に込められ、そして竜へと叩き付けられる。

苦しげな叫びが上がる中で、ジョージは背負つた獲物を抜いた。布をがしりと掴むと、ベルトを引き千切りながらそれを拭い去る。

ばさりと赤い野原に白い花が咲き、隠されていた棘が姿を現す。

白日の元に晒されたその武器のシルエツトだけを見て名を付けるならば、馬上槍ランスと呼ぶべきだろう。だが、通常の馬上槍と比べてその全長は聊か短過ぎる。二分の一程の長さしか無く、またより太いだがそんな違いは、槍全体を構築する機構と比べれば小さな差異であると言わざるを得まい。

金属製の柄には梃子が付けられていると先に書いたが、その梃子は鏢の部分に内蔵された動力部と繋がっていた。その機関には接続口があり、そこには缶詰よりもずっと大きい金属缶が取り付けられている。この中に込められているのは、圧縮された蒸気だ。外部からの熱源を無くし、代わりとして最初から使い捨てる目的で溜め込まれた蒸気の缶、『圧蒸缶』を使うこの機関は『圧蒸機関』と呼ばれている。『超蒸機関への革新家』ハンス・エーヴァルトの手で造られ、『超蒸機関』とはまた別の発明品として、主に手で持てるサイズの機械の動力に使われている代物だ。梃子を引く事で缶の中に込められた蒸気を解放し、機関を動かす。そこから更に動かすのは、九層の螺旋構造をした鋼鉄製の穂先であろう。先へ先へ、次の層へ次の層へと伸びたそれが如何なる動きをするのか。それは直ぐに判明した。

まだ体勢を立て直せぬ竜の上で器用に立ちながら、ジョージは両手で柄を握るとその背骨に向けて穂先を突きつける。力と体重によって槍が押し込まれ、ぶしゅりと刺さって再度苦悶の声が上がった。しかし、分厚い筋肉と荒い鱗が鎧となり、それ以上奥まで行かない。それでも突きながら、彼はぎちりと梃子を握った。

がきりと鉄と鉄が噛み合う音がし、封印されていた蒸気が機関の中へと解き放たれる。猛烈な噴出が動力となり、複雑に配置された歯車達が呻き声を上げて廻り出す。その力はやがて穂先へと至り、機構を発動させた。

九つの層が回転を始める。右廻り、次は左廻り、そしてまた右廻りと互い違いになって回転する。竜の息吹さながらに鏢から蒸気を

吐き出して、猛然と回転する穂先はまるで竜巻だ。

竜が耳を劈く様な雄叫びを上げた。鱗が剥ぎ取られ、肉が抉り取られ、無数の鱗と夥しい鮮血が白煙と共に噴出。ジョージの顔に小さな傷と汚れを付けて行くが、彼はその拳を離さなかった。そのまま更に体重を掛け、機巧時代の神器を突き込む。激痛に竜の体が仰け反り、足場が不安定になる。持ち上げた前脚を大地に叩き付けた衝撃に、ジョージは槍と共に空中へと投げ出された。梃子を離しながら地面の上を転がり、その力のまま起き上がって身構える。

そのジョージに向けて、竜が激しい呼気を吐き出し、威嚇した。真紅の胴体かばたばたと濃厚な血が垂れ流れているが、先程受けた傷自体は既に塞がれつつある。

筋肉の繊維が音を立てて紡がれるのを捉えながら、ジョージは自分が敵対している者の存在を改めて思い知った。ちよつとやそつとの傷では倒せない。多くの不死身に近い保因者達ですらそこを破壊されれば死滅してしまう生物の要、脳か心臓を抉り取らねば駄目か。そう感じながら、槍を向けた。

圧蒸式螺旋型機械槍『ゲオルギウス』。

それがその槍の名前だ。竜殺しの聖者にして、『ジョージ』の語源となった者、その名を冠した機械仕掛けの槍。『極小要素の変身者』グレゴール・ゲルヴィーヌスの手によって作られた、対化物戦専用個人兵装。担い手ジョージですら持て余す力を誇り、十九醒紀現在において最高の破壊力を持った、最強の近接武器である。

恐らくその威力を尤も理解しているのは、ジョージの眼前に立つ人ならぬ竜であった。

竜は顎を開き、威嚇する様に後ろ足を立て、前足を伏せながら尾を振り立てているが、決して近付こうとはしない。その瞳には明らかな怒りと確かな憎しみが込められているが、その間に隠れて恐れも宿っていた。自身の体躯よりも遙かに小さな、少なくとも外見は人間如きの彼に、その彼が持つ螺旋の槍に恐怖しているのである。

騎士と竜。十ヤードの距離を保ち睨み合う両者は、ここに来て対

等の存在として対峙した。

勝てると言う感慨がジョージの中に湧き上がった。ルフィナと共に居た時に感じた勝利への確信が再び巻き沸き起こる。腹の底から笑ってしまいそうになったが、ぐっと力を込めて押さえ込んだ。

そして彼は自らは巨人であるかとも言う様な足取りで一歩踏み込む。淀んだ黄金の瞳はギチギチと竜を見据えて離さず、ゆっくりと前へ。竜が喉の裂けんばかりに吠え立てるのにも関わらず、一歩一歩と近付いて行く。

両者の間に緊張の糸が紡がれ、ジョージが進む毎に張り詰めてゆく。何時切れてもおかしくない状態だ。

その糸を先に切ったのは竜の方だった。長く伸びた首を一直線に上へと向けると、川辺で水を呑むかの様に空気を吸い込み始めた、喉元がごごつと膨らみ、腹が肥大化する。ジョージはそれがどう言った行為であるのか、直ぐに察した。だが無様に逃げたりなどしない。槍を握る手に力を込める。

ぐらつと長首が揺らめき落ち、大口を上げた醜悪な顔が前面に出た。眼を見開くと、竜は息吹を吐き出した。

口内にて分泌される特殊な体液が大気中で化学反応を起こし発火、爆発する。個体によつて性能も能力も千差万別の為一概には言えないのだが、基本的に竜が吐き出す『息吹』とはこの様なメカニズムを持つて行われる。何とも攻撃的で、一生物が持つ機構としてはやり過ぎもしい所だ。尤も、その機構について解明されるのは、竜の存在がより一般的なものとなった二十醒紀も後半になって漸くであり、今この時代ではただ何か吐き出すのだとしか認識されていない。ただ仮にその事が解つていたとしても、ジョージがやる事に何ら変わりは無かったが。

真紅の顎から放たれた火弾が真っ直ぐに迫る中、彼は槍を左から後ろへと振り被った。焼け付く様な嫌な臭いが鼻の直ぐ側に感じられた瞬間、ジョージは力任せにゲオルギウスで払う。梃子を握られ、螺旋の回転を始めた穂先は、火弾の大元、燃え盛る液体を絡め取り、

そして掻き消した。左後方から右後方へ、振り払われた槍の先から四散した炎が流れ行き、やがて霧雲の如く散って行く。

その時竜が示した表情を人間の感情に例えるならば啞然と言った所だろう。ありえない、と目の前に起こった事象を必死に否定しているのが、その顔にありありと伺える。ジョージの口元に思わず笑みが籠った。直接この体で受け止めるのは流石に無謀であり無理だろうが、ゲオルギウスを持ってすれば止められる。そう自惚れた。竜の最も恐るべき武器を無効化出来たのだ。ならば、後の話はもう簡単だ、と。

ふふつと鼻を鳴らしながら、ジョージは右後ろに槍を構えながら、先程よりも速い足取りで歩き出した。それに気付いた竜が、呼吸も満足にせず火弾を連発する。しかし当たらない。火弾をより速く、より遠く、より正確に当てるには大量の空気をその肺腑に溜め込み、吐き出さなくてはならないからだ。安売りされた火の玉は、ぼんぼんと見当違いの所で盛大に火柱を上げるか、或いは螺旋の竜巻によって簡単に打ち消される。

その間にもジョージの歩みはどんどん速くなり、そして遂には走りへと変わった。ゲオルギウスを前面に突き出し、全力疾走する様は中世騎士達の馬上試合、ジューステイングさながらの勢いだ。梃子を握り締める。圧蒸機関が唸りを上げて、噴出される蒸気が爆炎立ち上る平原の中を白い線を残しつつ、真っ直ぐに伸びて行く。

騎士の渾身の突撃を、か細い息吹では最早止められない事を悟ると、竜は鎌首を下げて待ち構える。

九つの層を持って一つの螺旋を成す竜殺しの槍と、獲物を引き裂き噛み砕いて来た無数の牙が激突する。

ゲオルギウスを、竜はその大口で止めていた。牙と牙の間を持って高速回転する刃を寸前で押し止める。ジョージはぎりつと歯を食い縛った。後一步踏み込めばその口内をずたずたに引き裂き、上顎を貫いて脳髓を掻き乱せる距離にあると言つのに、それが出来ない。梃子が折れんばかりに拳を握り、全身に力を込めて突くが、竜の力

も相応のものだ。それ以上に厄介なのがその再生力。回転に巻き込まれ、粉微塵となつて行く間にももう新しい牙が出来上がっている。例え腕を失つても数日後には再び生えてくる様な体のジョージだが、これはそれ以上だ。洒落にならない。

槍と牙を持つて行つた罅迫り合いはそして、騎士にとって最悪の結末で幕を閉じた。

ぶしゅうと間抜けな音を立てて、圧蒸機関が停止したのである。理由は簡単だ、圧蒸缶の中に入っていた蒸気が抜け切つたのだ。奇人的天才の恐るべき発想と技術により驚く程の蒸気を込める事に成功したとは言え、それが有限である事に変わりはない。ぞつと全身から脂汗を流しつつ、ジョージは新しい圧蒸缶を腰から取り出し、空缶と取り替えた。この一連の作業は、ここに来る前に幾度か練習した為に手早く終了する事が出来た。しかし、既に遅かつた。

突然ジョージの足場が無くなつた。ふわりと浮き上がった彼の金眼に、傷一つ無く槍の穂先を噛んでいる牙、そして不適な笑み……錯覚かもしれないがそう見えたのだ……を浮かべる竜の顔が映る。歯を噛み締めながら再び梃子を握るよりも一歩速く、竜はぐるんと首を回しつつ、勢い良く槍ごとジョージを吐き出した。想定外な遠心力と呼気により中空に放り出され、彼は叫び声を上げながら宙を舞う。

天が下に地が上になり、やがて彼は頭から大地へと墜落した。凄まじい衝撃が体を貫き、それでもまだ止まらずに幾度も転げた後で、漸くジョージは止まつた。全身の骨が軋み、額から熱い液が流れて行くのが感じられる。常人であれば間違い無く死んでいただろう。しかしこの体なら損傷を追つただけでまだまだ動ける。手でぶれる頭を抑えながら、自らの人ならざる身に感謝していた彼は、そこで恐るべき事実に気がついた。自分が今頭を抑えているその手は、先程まで無双の強さを誇っていたあの槍を握っていた手では無かつたであろうか、と言う事に。

慌てて辺りを見渡せば、自分が今いる所から遥かに離れた所にゲ

オルギウスが突き刺さっていた。中はどうなっているか解らないが、少なくとも外側に目立った変化は無い。流星は七人教授とやらの力作だ、とほつと胸を撫で下ろす彼の視界が、突然暗くなった。

安堵の吐息を漏らした胸が、どくりと高鳴る。そしてその体は、異常に気付いた瞬間既に前に向けて飛び出していた。これは最初の遭遇の焼き直し。本来居るべき、一度は奪われた場所に、再び主が舞い戻った。

次の瞬間、ジョージの背中に熱と衝撃が飛んで来る。

うおつと間抜けな声を出しながら、前へ前へと転がって行く彼はその中で、天高く翼を奮わせる竜の姿を捉えた。先程まで居た場所には黒煙を上げる抉れた地面が見える。体勢の整っていない今ではとても到達出来ぬ領域から、槍無くば防ぎ切れるものでは無い攻撃が飛んで来たのだ。

一気に逆転した立場に色めき立つ暇も無く、彼はよるめきながらも立ち上がる。その間にも竜は存分に大気を貪り、次なる息吹を吐き出さんと待ち構えているのだ。ジョージは糞つたれと悪態を付きたかったが、そんな暇等無かった。充分な酸素を受けて吐き出された火弾の威力は至近距離で受ける大砲の直撃すら超えるのである。今は走るのが先決、と左右の脚を必死で動かす彼の元に炎の雨が降り注いだ。ちゃんと動けるとは言え、体の調子は完璧とは言い難い。火弾の直撃を食らえばそこで脚は鈍り、その次の攻撃、その次の次の攻撃を防げなくなる。つまり、実際には一度まともに喰らってしまつたらもうそこで終わりと言う訳なのだ。必死にもなるうものである。

直ぐ側で高々と炎の柱が上がる中でしかし、ジョージは諦めてはいなかった。復讐を果たせない等とは、微塵も思っていないかった。何故なら彼の視線の先には、かつてサタンの化身たるドラゴンを打ち破った大天使ミカエルの燃え盛る剣にも等しき希望の武器、ゲオルギウスがあつたからである。

ジョージは吹き上がった火柱を突き抜けると、憤然と疾走を開始

した。保因者^{キャリアー}としての力を最大にて發揮して大地を踏み締めれば、大量の砂煙が後方へと舞い上がってその痕を残して行く。

その様子に、竜の方も槍の存在に気がついた様だ。本当の意味で人では無い存在に、畏怖の念を叩き込んだ武具だ。放っておく事等生きる事を本能とする生物が出来よう筈も無い。竜は息吹を吐くのを止めると、一度大きく翼を震わせてから、ゲオルギウス目掛けて滑空して行く。

天と地に分かれて、二つの影が平原を駆け抜ける。神の塔の如く何処までも平らな草原に聳え立つ槍目指して、その栄光目掛けてまっしぐらに。どちらも全力で脚と翼を奮えば、距離等と言うものは容易く零と化す。その時、大地に痕を残し、大気を掻き分け、影の一つが栄光の槍を掴み取った。

ジョージである。ゲオルギウスは再び彼の手に収まった。竜も直ぐ側まで迫っていた。後ほんの少し速ければ、螺旋の塔は一切の加減を知らぬ暴力に屈していただろう。だが己の脚を馬と成した騎士の方が一歩速かった。

彼は柄を握るや否や、即座に艇子を引いた。既に新たな圧蒸缶を収められていたゲオルギウスは、勝利の大喝采を上げながら天へと登り行く。その様に眼もくれずジョージはしゃがみながら、斜め上より背後に向けて槍を振り払った。

両手で持てるサイズの竜巻は、竜の翼を引き千切る。それは正に字義通りにてあった。眼前に顎を広げて迫っていた竜の右翼を、まるで襪褌雑巾か何かの様に粉微塵とし、風の中にはら撒いたのだ。

鼓膜を破る様な叫びと共に、竜は墮ちた。丁度ジョージが中空へと投げ出され、墜落して行った様に。巨体を支えていた翼の一つを失って、大地の楔に捉えられたのである。

噴水の様に血を噴出しながら、竜は先程まで空を滑っていた様に、地面の上を滑って行った。緑と茶が入り混じったテーブルの上に無残な痕を刻みながら、その巨大な体は止まる事無く突き進む。最初に竜が飛び出した、森の方へと。

槍の喝采が静寂へと変わったのと、森の沈黙が轟音に破られたのはほぼ同時であった。吐き出すべき蒸気を止められ、キュラキュラと穂先が停止するのを待つと、ジョージはそれを肩に乗せながら、森へと向かった。

歩みは遅い。先程の疾走から急に立ち止まった事で、疲労と苦痛がどつと押し寄せてきたのだ。呼吸が荒く、汗も滝の様に吹き出た。しかし、そこには勝利を手にした笑みがある。実際まだ手にしてはなくても、それはもう目の前にある気がした。今その手には確かに仕留めたのだと言う感触が宿っている。実際森に堕ちてから竜はまだ姿を見せていない。こんなゆっくり、こんな無防備に歩いていると言ふのに。

やがて凄惨たる状況を示している森に踏み込むと、ジョージの予感確信に変わった。

幾多の木々を突き破り、倒れて来たその木に埋もれて、竜がうづくまっていた。翼は再生を始めているが、先程見せた速度とは比べる必要も無い程遅い。ジョージの姿を認めた瞬間、牙を剥き出して威嚇するが、その間からどろりと血が溢れ出した。巨体であった為に余計落下による損傷が激しかったのだろう。ちよつとした池になる程血を吐き出し続けている様子からすると、内臓はぐちゃぐちゃになっている筈だ。どれだけ強い耐久度を持つと、生命である以上その要である部位が傷付いてはどうにもならぬと言ふ事か。少なくとも今、そしてもう暫くの間は。

そんな竜に向けて、ジョージはゲオルギウスを構えた。汗と砂と血に汚れた顔に、にやりと齒をむき出しにした笑みが浮かび上がる。勝つたのだ、狩ったのだと言ふ声が脳裏で木霊した。もうこの竜に何かをする力等残っていない。今火弾等を撃てば自分を燃やす様なその体で。そう思いながら、はあはあと笑いながら近付いて行く。

竜は徐々にやって来る死の騎士を睨んでいた。ごろごろと喉を鳴らし、血に染まった牙を見せながら。だがやがて諦めたのだらう、すつとその瞼が落ちた。捲れ上がっていた唇が戻り、喉も鳴き止ん

だ。最早ここに来て、何も出来ぬ事を察したのだろう。ジョージはそう考えた。

そして彼は竜の顔の直ぐ側までやって来ると、ぶおんと槍を頭上に向けて振り上げた。一切の歪み無く真つ直ぐに天へと伸びるゲオルグウス。その姿は太陽の下に晒され、まだ乾ききらぬ血を赤々と輝かせた。それは正に竜殺しの槍と言う名を送るに相応しい、一種の威厳を備えている。

その担い手たるジョージは、槍を掲げたまますつと瞳を瞑った。これで長きに渡る悪夢は終わる。不条理に片が付く。理不尽なる存在は一掃され、後には勝利の歡喜だけが残る。ただ後この槍を突き立てるだけで、復讐に……疲労と歡喜の為だろう、誰の何の復讐だったか、霞が掛かった様に思い出せなかったが、兎に角……終止符が打たれるのだ。彼は思わず笑い声を上げた。息を吸いながら笑い、瞳のみ上に向けながら笑い、腹がよじれる程に笑った。崩れ落ちた竜の前で、血の海にその脚を浸しながら、盛大に笑った。笑い続けた。

だが何時までも笑ってはいられない。彼は腕を振り下ろしながら、梃子を引き絞った。

咆哮が上がる。それは終幕を告げる鐘の様に響き、やがて静寂が訪れた。

そして今闘争は終わり、ジョージ・サリンジャーの半年に及ぶ苦悩は幕を閉じたのである。

第十章

「これはまた派手にやったものね。とてもじゃないけど、人間業とは思えないわ。嗚呼、木瓜たわね私。片方は半分人間じゃなくて、もう片方はそもそも人間じゃなかったか……でもちよつとこれは呆れるわよ？」

そう言つて、魔女ルフィナ・モルグは辺りを見渡しながら肩を竦めた。

今の彼女はルフィナの姿だ。淡い緑の縦巻きロールヘアと言う奇抜な髪形以外を抜かせば、絶世と言つても構わないだろう美女だ。その美しさは普段と……尤も、普段人前に出る時の姿は老婆モルグであるし、そもそも変身能力を持つて二千年近い歳月を生きてきた魔性の女に『普段』等と言つ言葉形容するのは大変に滑稽であるのだが……変わらない。しかし、何時もこの美女の姿とセットで着ている髪と瞳と同じ色をしたドレスは、今日は鴉の羽飾りが付いた黒いドレスに成っていた。ベール付きの黒い帽子まで被つたその格好は、正に喪服である。

そのルフィナが今居る場所は、つい先程まで戦争が行われていたかの様な有様の平原であつた。至る所に焼け焦げた跡と共に巨大なクレーターが造られ、その周囲には降り積もつた土砂と焼け焦げた草が円く山を成している。自然の中で何の制約も受けず伸びていた秋の草木は、象か或いはもつと巨大な生物によつて無残に踏み荒らされている。何よりも酷いのは平原を二分するかの様に真っ直ぐ刻まれた跡であり、大地を抉り草花を散らして、長く伸びていた。平原にぽつんと佇む、木々の倒れた小さな森に向かつて。

ルフィナは森をじいつと見つめてた。そして、何処からとも無くぱつと緑の日傘を取り出すと、優雅な歩みで巨人が鋤で耕した様な跡を辿り始めた。実には上機嫌な様子で、足取りも軽やかだ。黒いドレスが白いドレスであれば、何処ぞの風蘭守人画家が描いた貴婦人

に見えた事だろう。

そんな見目麗しき女性は、跡を頼りに森へと辿り付いた。そこは遠目で見るよりも酷い場所だった。強い衝撃を受け止め、木々と言う木々は倒れ、枝と言う枝は折れ、葉と言う葉は堕ちていた。その衝撃の主を埋める様に。

それは一匹の竜である。より正確に言うならば、最後に『だった物』を付けよう。誰が見ようと、その竜は既に死んでいた。背中には錐で開けた様な円形の傷跡が痛々しく付けられ、かつてはその巨体を支えていただろう右翼はズタズタに引き千切られた傷の断面を覗かせている。高温で焼け爛れ、今だ煙が昇る口からは論曇ロンドンがテムズ川の汚泥の如き大量の血が流れたまま半ば固まっており、周囲の地面にはどす黒い池が出来ていた。

その側にちよんとしゃがみ込むとルフィナは、人差し指で何も映さぬ水面を掬って見た。半固体化した液体が白い指にねつとりと絡み付く。ひくひくと鼻を近付け、匂いを嗅いで見た彼女は、徐にそれを口に啜えた。濃厚な血の味の後で、複雑怪奇な後味が舌に残り、彼女は思わず身震いした。その原因は味だけでは無かった様で、んつと声を上げながら、ルフィナはうつそりと竜の血溜りを見つめる。「一体何年ぶりかしらね。百年？千年？多分もつとだわね。実に懐かしくて素晴らしいわ。ちょっと若過ぎるのが珠に傷だけど、今のままでも熟成させれば充分行けるわね。貴方の事は残念だけど、良い物を残してくれてありがとうね、ジョージ・サリンジャー？」

火照る顔を手で抑えながら、彼女はそう言った。血溜りから視線を、竜の側で倒れている物に向けて。

それはあのジョージだった。衣服は殆ど灰となり、溶けた金属が黒焦げた体にへばりつく様な状態だったが、ルフィナにはそれが数ヶ月の間だが共に居た男であるのが直ぐに解った。否、解っていた。ここに来た時から、ここに来る前から、彼が既に死んでいる事を彼女は解っていたのである。所謂蟲の知らせであり、一種の親子、血縁関係を結んだ保因者キャリアー同志に感じられるものだ。理由は定かでは無

いが、片方に何かがあれば、もう片方は何と無くでもそれを知る事が出来るのである。ルフィナクルスの保因者であれば、確かな感覚として理解出来た。だからこそ、彼女は己の翼でここを訪れたのだ。「この様子だと健闘した様ね。いえ、寧ろ押ししてたんでしょ。ふふ、今だから言うけど実は駄目なんじゃないかって思ってたのよね。私自身が相手したって絶対勝てない自信があるんだから。や、まあ私はそもそも戦う気なんて無いんだけど。だと言うのにここまで戦い抜くんだから、本当に凄いわジョージ。死体すら残ってたんだから生きてたら皆貴方を讃えた事でしょう。竜殺しの英雄・聖ゲオルギウス再来、とね。」

そう言いつつ、ルフィナは再び血溜りへと目を向けた。すつと手を降れば、先程まで存在すらしていなかった空き瓶がその指に握られている。もう片方の手にはスプーンが現れていた。それでこそぎ取る様に血を瓶に詰めながら、彼女は唇を振るわせる。既に物言う事の出来ぬジョージに向けて。彼の方に一瞥もくれずに。

「でも貴方は死んでしまったわ。哀しい事だけど、でも皆何時か死んじゃうものだからそれ自体は別にどうって事でも無いのよ、もう慣れたし。問題なのはね、何故貴方が死んだのかと言う事。こればかりは、実際見てみないと解らないからね……ん、終わり、と。持ち帰れるのはこれ位ね、残念だけど。」

ルフィナは喋りながら絶えず手を動かした。やがて空き瓶は竜の血で満たされた。そうして彼女はスプーンを瞬く間にコルクの蓋に変えると、瓶に押し込む。きつちり口に嵌めて密閉すると、彼女はその瓶を、襟から胸にひよいと入れた。何処に仕舞い込んだのか、服の上では最早瓶の形は確認出来ない。

「さて、それじゃ何が貴方を殺したのか、見させて頂くわね。」
一連の作業を済ませ、ルフィナはジョージの側まで歩み寄った。その焼け焦げた顔をまじまじと覗き込む。

そして、納得した様子で微笑を浮かべながら、こう言った。
「嗚呼……やっぱり貴方、吞まれちゃったのね。残念だわ、凄く残

念。」

ジョージは一切の衣服を纏わず、その体は真っ黒に焼け焦げているのだがしかし、最期に浮かべていた表情は解った。笑い、である。それもただの笑いでは無い、盛大な高笑いだ。歯を剥き出し、舌を突き出し、顎を外れんばかりに広げながら笑っている。今にも暗い喉の奥から笑い声がしてきであった。

その体は、仰向けの状態で、頭上に手を掲げながら仰け反ると言う奇妙且つ滑稽なポーズを取っている。直ぐ側に圧蒸式螺旋型機械槍ゲオルグウスが、まるで墓標の如く突き立っていた。

しゃがみながら、半ば炭と化したその頬をルフィナは抱えた。間近まで顔を付けつつ微笑を湛える。

「随分凶悪な死に面じゃない。全く、どっちがどっちなんだか……。」

と、その時竜の屍の影で、がさりと物音がした。どさつとジョージを離しつつ、彼女はそちらの方を見る。

そこには、小さな竜の姿があった。恐らく親であろう、倒れている竜を丸々縮ませた様な真紅の鱗を持つ子竜は、前脚の付け根辺りに隠れてじつとルフィナを伺っている。見つめる大きな瞳には、ある感情が表れていた。それは人間のものに例えると恐れであり、悲しみであり、そして怒りであり、憎しみであった。

ふつと微笑みつつルフィナが手を差し伸べると、二千年の歴史を感じ取ったのだろう子竜は、びくんと大きく震えて親の影に隠れる。そしてがさがさと草葉を揺らしながら、森の奥の方へと掛けて行く。暫くした後、ばさりと翼を羽ばたかせる音と共に、かすかに見える森の向こうの空へ、子竜が飛んで行くのが垣間見えた。

フラレちゃったわね、と子供っぽく舌を出しながら言うと、彼女は再びジョージの方を向く。

「最初は兎も角、今回は一緒だったと言う訳ね。きつと貴方は、知らずに逝ったんでしょうけど。」

そしてまた飛び行く子竜へと視線を移す。遙か彼方、迫り来る暗

雲へと向かう彼は一度だけ吼えた。その声は甲高く、何処までも尾を引いて残り続け、やがて何の前触れも無く消えて行った。

その後、近隣に住む人々が異変に気付き……異変が起こっている事に気が付いていた者も多数居たが、一体近付ける者が居たと言うのだらうか……森へとやつて来ると、彼等はそこで正に神話からやって来た様な竜の屍と、怖気を感じさせる笑いを浮かべる男の焼死体を見つけて、仰天した。

この事件はすぐさま論議に伝わり、大いに議会と学会と新聞を賑やかした。半年程前に竜が襲ったと言う村があるサマセット地方で発見された為に再び竜論争が燃え盛る中、市民の関心は竜と共に居た男に向けられる。

凄惨たる状態で竜は死んでいた事と周囲の荒廃した様相から、人々はこの男が竜を倒したのでは無いかと考えた。しかし、仮に保因者であつてもこの様な化物を倒せるとは、保因者達自身でも思えなかつた。しかもその男は完全に生身であり、武器らしきものは一切持っていないかつたのである。

結局世間は、この男が何者で何故そこに居たのかついに解らず、謎の焼死体は時の塵の中に埋もれて行く事になる。ただ最初に発見した者達だけは、その余りの死に顔に恐怖し、悪魔に魂を売つたのか或いは悪魔そのものに違いない、と村の酒場で震えながら囁き合つたのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4785c/>

騎士と竜 Dragon Slayer

2010年10月8日12時31分発行